

水島の合戦物語

今から約八百年前の昔、時は寿永二年（一一八三）閏十月一日、日蝕の日に現在の玉島港灣内で行われた珍しい源平合戦の物語である。

木曾義仲勢によつて京都を追われて北九州へ落ちのびた平家一族は、瀬戸内の水軍を何とか味方に引き入れて体制を立直し、京都奪還を目ざして東進を開始した。平家方は平重衡・通盛・教経の三勇将が率いる兵船三百余隻七千人が柏島沖に出陣して、瀧所（どろ）の政所が、玉島大橋西詰の小高い丘に付近に赤旗を並べ柵を設けて陣地を構える。

一方、木曾義仲は後白河法皇の策謀に利用されて平家追討の院宣のもとに山陽路を西下した。そしてその手始めとして、当時備中の南部一帯に勢力を持つていた平家方の武将妹尾兼康、

宗康父子をその根拠地板倉（いたくら）の現岡山市吉備津神社（西方）で討ちとり、勢いのつて先鋒隊の矢田判官義清・海野十郎行広の二勇将が率いる兵船三百余隻五千人が乙島の渡里付近に出陣し、城（玉島大橋東詰の北方標高三十メートルほどの台地）と呼ばれるところへ白旗を押し立てて陣地を構えた。

西軍は、わずか五百メートルほどの海峡（玉島大橋の下付近の海域……）当時は「水島の途（瀬戸の意味）」と呼んでいたようである。さんで、時こそ来たれと相對峙した。

初冬を迎えた寿永二年閏十月一日（新曆十二月月初めごろ）、夜明けとともに合戦の火ぶたが切つておとされた。

初めのうちは勇猛をもつて聞えた木曾源氏が有利に見えたが、なにしる木曾の山中で育った軍団だけに騎馬戦にはめっぽう強いが、海戦には全くの不馴れとあつて次第に旗色が悪くなつ

た。その上、山嶽と悪口を言われる文盲が多かつた木曾勢は、これから起る日蝕という奇異な自然現象を全く知らず、ただ恐れ戦くだけで戦意を失い敗れることとなる。

かたや海戦に強く、しかも戦術にたけた平家軍の策略に全くはまりこんだ木曾源氏が体勢を立て直そうとするころ、にわかには西風が激しく吹き出して海は大しけとなり、海戦に慣れない源氏の兵士たちは船の上に立つことができない有様となる。

その上、真昼というのにあたり一面薄墨を流したような暗闇となり、日蝕を知らない源氏の兵士たちは天変地異にすっかり恐れをなして大混乱……。さらに不運にも矢田義清・海野広行の二人の大將まで討ち取られた木曾源氏は全軍総崩れとなり、平家軍の一方的な大勝利で終わった。

わずか数時間の海戦であつたと言われているが、源平合戦史の中で平家が勝つたのはこの合

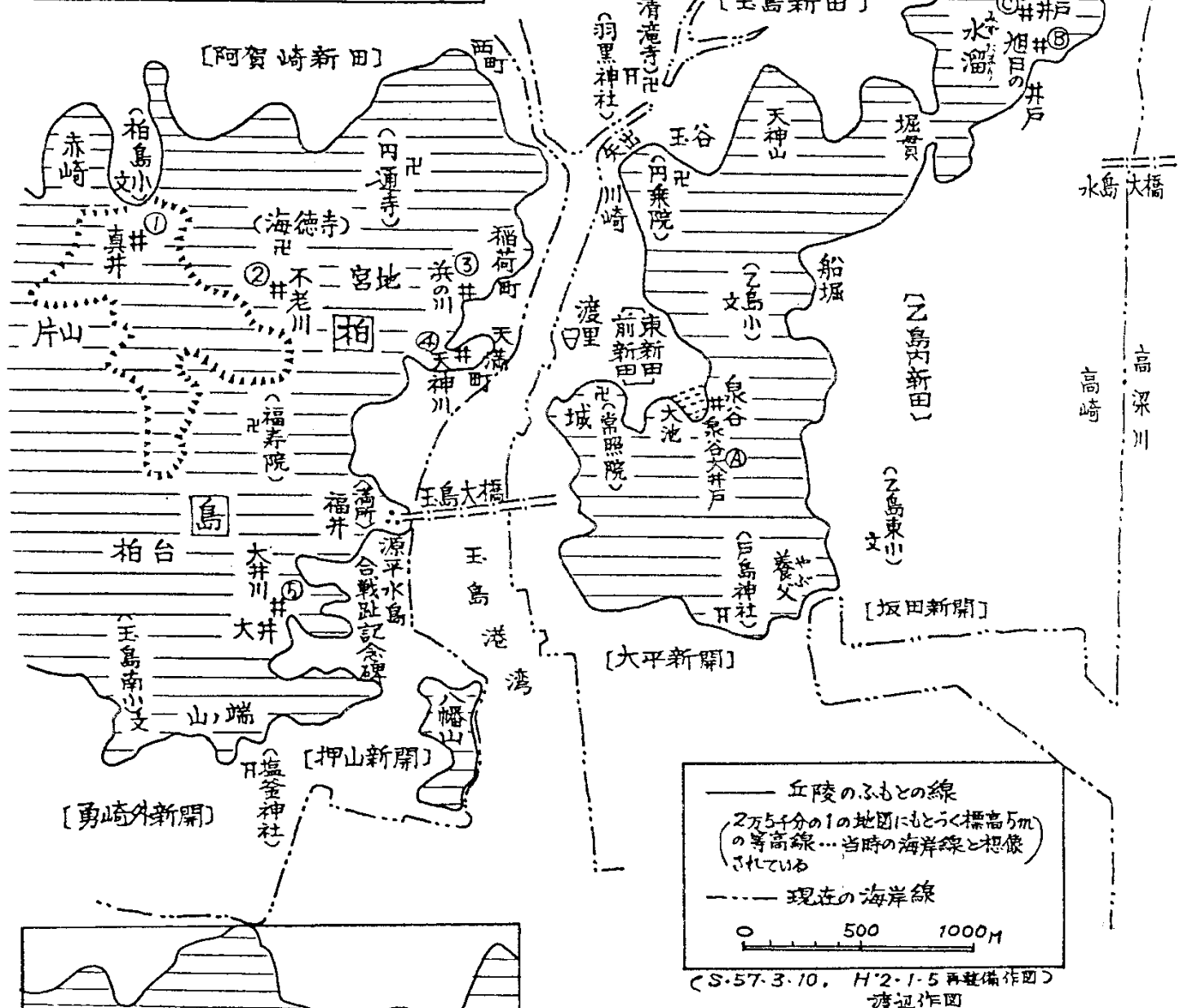
戦だけであつた。

命からがら京都へ逃げ帰つた木曾源氏の軍団は極く僅かであつたといわれ、その後、時を経ずして源頼朝一族の率いる関東源氏によって滅ぼされることとなる。

また平家一門は翌永三年二月には「一ノ谷の合戦」に敗れ、さらにその翌年の「元暦二年二月には「屋島の合戦」に敗れて下関へ走ることとなる。

世に「水島の途との合戦」といわれるこの海戦で、おびただしい戦死者で水島灘は血に染つたともいわれ、「杓を貸せえ」の怨霊物語もこのことに起因するとも伝えられている。——杓島物語として後述する——

源平水島合戦のころの想像図
12世紀末水島の途付近並びに名泉の分布



水島の名水

- ① 真川 (水島中老人穂の家付道)
- ② 不老川 (海徳寺上り口 太田功氏宅前)
- ③ 浜の川 (平尾山本酒造裏通り北西角)
- ④ 天神川 (天満町 天満宮 裏山)
- ⑤ 大井川 (大井 大井池のほとり)

乙島の名水

- ④ 泉谷大井戸 (泉谷 大池の東岸奥)
- ⑤ 旭日の井戸 (水溜南斜面)
- ⑥ 夕日の井戸 (水溜北斜面)

まぼろしの水島

あつたようである。

水島合戦にいわれる「水島」とは「柏島」か「乙島」か、今のところ決め手となるものは何一つないが、古代から航海する船にとって清浄な真水は貴重な水資源であつただけに、「水島」というだけで広く知られ通用していたものと想像される。

昔から郷土史を研究する人たちによって様々な議論がたたかわされてきているが、備中府志という書物に「天の真井」という名水あり、水島なれども水多し」と記述されている柏島のことであるという説が強く、今でも柏島には五大泉（川）と呼ばれる水量豊かな五つの井戸が残つており、このうちの二つは現代まで酒造りに使われたこともあるといわれる。

五大泉（川）とは、真川・不老川・大井川・

水島というのほもともと「真水の湧き出る島」ということで

天神川・浜の川と呼ばれていたと言ひ、最近になつて玉島文化協会によつて泉跡に石の標柱が建てられ保存に力を入れてゐる。

ところで、乙島にも「泉谷」というところに噴井があり、夏冬とわす多量の地下水を噴き上げていたといわれ、その井戸は今「泉谷の大井戸」として地元民によつて保存されている。

また「水溜」と呼ばれるところの山の南側に「朝日井」、北側に「夕日井」と名付けられた井戸があり、どんな日照りでも水が絶えることがなかつたと伝えられ、現在でも大井戸が保存されている。

さらには、新熊野権現勸請伝という書物によると、その昔、役の小角の高弟義学ら五名を先達として、熊野権現の御神体を奉じて三百余人の山状を従え、船で瀬戸内海を航行中、一つの島（塩生沖の島）に着いたが水が乏しいので義学が持つていた杵杖を海中に立て加持祈禱を

すると、海水がたちまち清水に変わったという。そしてその後三年間、塩気のない清水が続いたといわれ、いつしかこの島を水島と名付けられたという。

この水島はその後「雨乞の島」とされて、弘安五年（二二八二）・文明四年（一四七二）・永禄元年（一五五〇）の三回にわたってそれそれ時代は異なるが、いずれも通生かよおの般若院の和尚が導師となつて雨乞い祈禱が行われ、その法力によつてそれそれ大雨が降つたと伝えられている。

しかしながら、現在ではいずれが水島であるかと、にわかには断定できる資料に乏しい状況である。



照

笠無山物語

寿永三年（一一八四）元暦元年（一二二二）十二月、源範頼が平家の拠点屋島の前哨線であった見島の北門、藤戸の平行盛を攻撃した「藤戸の合戦」にまつわる伝承物語である。

平家は見島（当時見島）の北岸・藤戸・粒江一帯に陣を構え、数百の軍船を従えていた。

一方、範頼の率いる三万の源氏軍は、日間山ひるまから加須山、有城にかけて陣を構えた。

両軍の間には幅五百メートルの藤戸海峡が横たわり、船がなければ渡れない有様であるが、平家軍はあらかじめ付近の船をすべて見島の北岸に集めて渡船不能の策を構じていた。

海戦に不馴れな源氏軍はなす術もなく対岸の山すそで手をこまねくだけ。その上、平家軍からは血気の若者が小舟を漕ぎ出して来ては、扇をあげて「ここわたせ」とあざ笑うが、地団駄踏んで悔しがらるばかり。

ここに源氏の勇將佐々木盛綱は、なんとかして海を渡り先陣を果たしたいとの念願から、夜海辺をさまよっている、遅よく土地の若い漁夫にめぐり会った。

盛綱はこの漁夫に衣類や刀などを与えて歡心をかき、「この海に馬で渡れるところがあるか」とたずね、漁夫の案内で浅瀬を渡り、ひそかに目印の竹を何本も立てておいた。

しかし、盛綱はこの漁夫から他へ情報がもれることを恐れ、その場で漁夫を刺し殺し首をかき切つて捨てた。

明けて十二月七日の夜明けとともに、盛綱は馬に乗り家子郎等六騎を従えてさんぶとばかり海に乗り入れた。

驚いたのは味方の源氏方、「気でも狂ったのか、引き返せせしと口々に呼ばわったが、耳もかさず、かねて目印を立てた昨夜の浅瀬をひた走りに依つて行く。

海の浅いことを知った源氏の三万余の大軍は、

関の声をあげて、佐々木に遅れるなとばかりに一斉に對岸の粒江・沖が市付近に押し渡った。不意をつかれた平家軍はあわてふためいて、われ先きと船に乗り、戦わずして命からがら屋島に逃れていった。けれども、船を持たない源氏軍は追うことができなかつた。

さて一方、大事な一人息子が殺されたことを知った漁夫の年老いた母親は、半狂乱となり、「佐々木といえど、母まで憎い」と叫びながら、近くの小山にある笹を手当りしだいに引き抜き、盛綱をのろいながら山中で果てたと伝えられている。

この老母の一念からか、その後この小山には笹が一本も生えないので、「笹無山」と呼ばれるようになったという。

補説

(1) 源平藤戸合戦後日談

後鳥羽天皇壽永三年・範頼 平氏を西海に妻
つや・佐々木盛綱亦従う。

時に平氏は友馬頭行盛を將として二千余騎を
率いて児島に拠り、讃岐の屋島と相呼応して源
軍の西下を阻止せんと欲し、豪族三宅氏と結び
藤戸海峡を隔てて之を防ぐ。

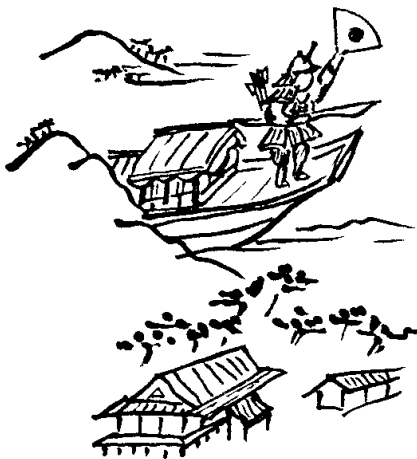
源軍の部將佐々木盛綱夜に乗じて一漁者を嚮
導(道案内)として、浅所を探知して之を渡り、
遂に行盛を破りければ平軍争うて屋島に逃げ帰
りぬ。

頼朝其戦功を賞し、自筆の感状を授けて曰く
「自古雖有渡河先例、未聞渡海之例。盛綱之勲
功先代未聞也。」と。

盛綱功によりて、児島を賜わり子孫茲に土着
して、如地・飽浦・田井の諸族是より出でて、
児島に蕃衍す。(子孫がふえて栄える)

此の年、一の谷戦あり。庄家長 平重衡を生
擒し功を以て備中草壁庄を賜わり、武蔵国よ
り移りて猿掛城を築く。

〔源平盛衰記〕



今天城小學校の校庭の一隅に
「児島」といふ小山があり、盛綱が藤戸寺で供養したときの御経を
埋めた経塚と浦男のための供養塔の魚塚が残されている

(2) 謡曲「藤戸」物語

謡曲「藤戸」は、室町時代初期・足利三代将軍義満のころ、世阿弥の観世元清によつて作られたと伝えられ、「笹無山伝説」の中で、届かぬ人間の深い哀しみ・嘆きを涙みとつて創作されたものといわれる。

物語のあらすじは、依々木盛綱が恩賞としてもらった所領地見島へ着任した日に、訴訟人にまじつて盛綱の眼前に現れた漁夫の老母が、声をふるわせて恨みを述べ、わが子の死骸のありかを尋ねる。

はじめのうちは「更に心得ず」と、殺したことを否定していた盛綱も、老母の厳しい追求めに抗し切れなくなり、「ああ音高し・何と何と」へのああ声が高い何と申すのだ」と扇で老母の声を制する。

武士として卑劣な方法で得た功名を罵倒する老母の声、さらには、「苦しみの海に沈め給ひしを、せめては訪はせ給へや・跡弔はせ給へや」とせしめる悲痛な声に、ついに盛綱は耐え切れなくなり、「あれに見えたる浮洲の岩の少し此方の水の深みに死骸を深く隠ししなり」と、自然し、歎き悲しむ老母を慰めて家に帰し、浦男のために仏事を営む。

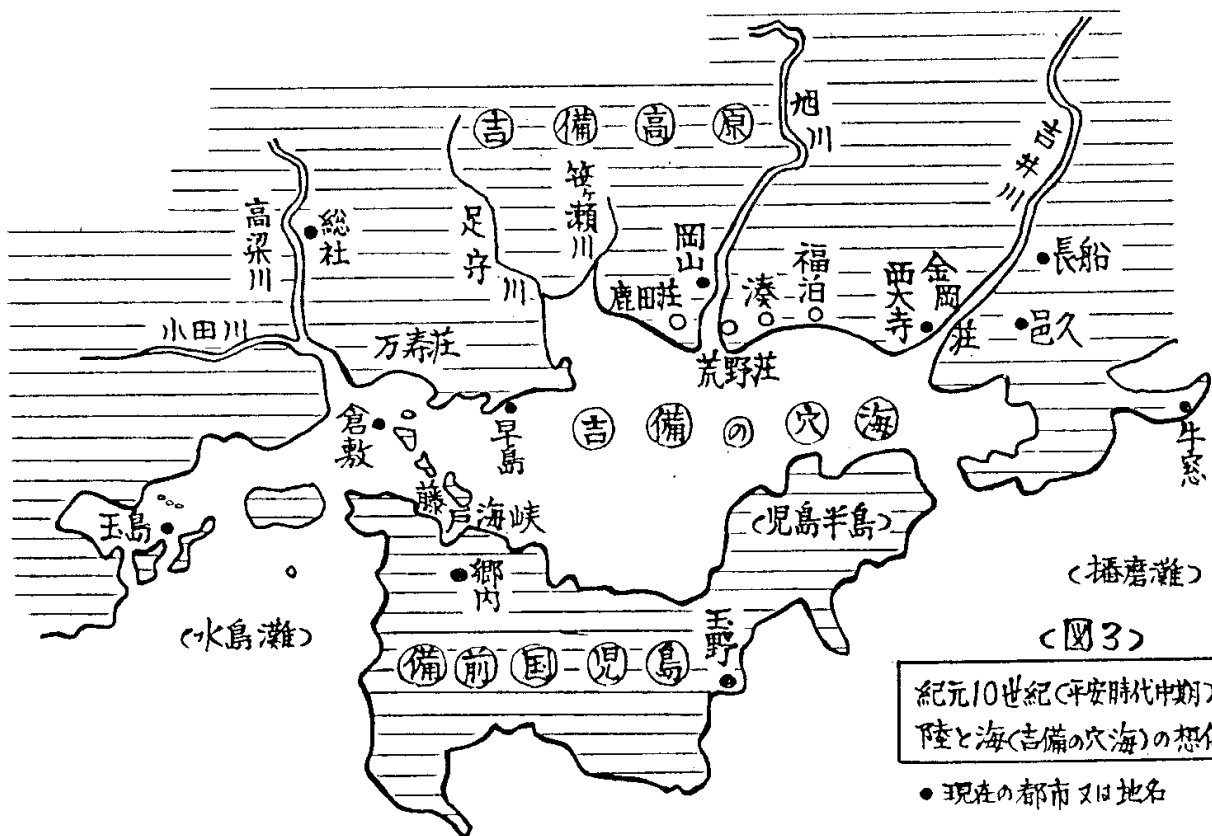
追善供養の中で、浦男の亡霊が現れて、殺された時のことを語り、「昔より今に至るまで、馬にて海を渡す事希代の例なればとて、この島を御恩に賜はる程の御悦びもわれ故なれば、いかなる恩をもたぶべきに、思ひの外に一命を召されし事は、馬にて海を渡すよりも、これぞ希代の例なる」と、肺腑をえぐる声を投げかける。そして「藤戸の水底の悪龍の水神となつて、恨みを晴らすべき」と思ったが、思わぬ回向を受けたので、成仏できたといつて消え失せる。

吉備の中海の沖積活動

縄文末期から
弥生後期にか
けての数百年

の間に、吉井川・旭川・高梁川の三大河川及び
中山河川による沖積活動は現在の山陽本線沿い
まで陸地を南下拡大させたことは前述したとお
りであるが、さらにその後の数百年の間には、
陸地の南下は一段と進み、西大寺・早島を結ぶ
線付近まで拡大し、中海は「穴海」の状態に変
化していった。(図3)

十一世紀初めへ平安時代中頃に、後一条天
皇の即位に当って善滋朝臣為政の詠んだ歌に、
「わたつみものどけかりけり 君が代は 藤戸
の島に波のあらねば」へ天皇の即位でお目出
たいから、ふだん波の荒い藤戸海峡でさえ、
波もたたない」というのがある。
このことから、当時から藤戸海峡は潮流の
はげしいところとして知られており、船乗りには



紀元10世紀(平安時代中期)ごろの
陸と海(吉備の穴海)の想像図

● 現在の都市又は地名

とっては神経をとがらせる航路の難所であったことが想像される。

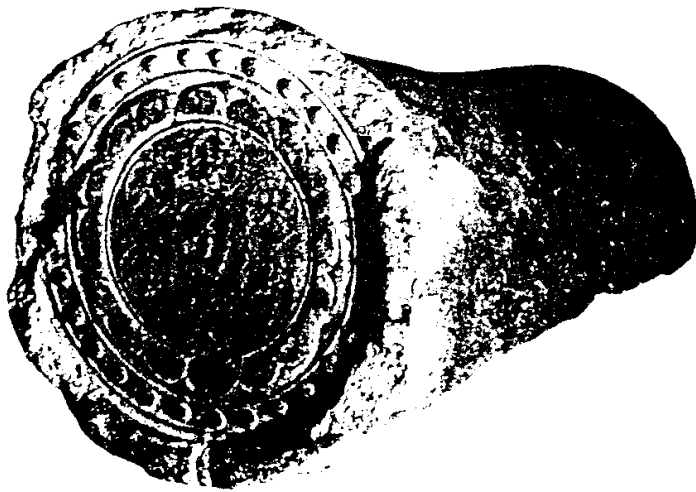
さらに約百六十余年後の治承四年(一一八〇)九月：(藤戸合戦の五年前)、幼くして壇ノ浦の水底深く沈んでいった安徳天皇の父・高倉上皇が平清盛とともに平家の氏神・安芸の巖島神社へ参詣したときの紀行文には、「船は備前国見島の泊りにつかれた。そして仮御殿をつくった」とも書かれている。

当時のいろいろな記録から、平安時代の内海航路のコースとして考えられるのは、外海の播磨灘から「牛窓」を経て「穴海」に入り、「福泊」(岡山市福泊)、「平井湊」(岡山市湊)、「荒野荘・鹿田荘」(岡山市平井・岡町・鹿田・荒野一帯)の沖合から「藤戸海峡」を抜けて水島灘の外海へ出ていたようであり、吉備の穴海もまだ海としての機能を十分持っていたといえる。(四三)

それが十三世紀の鎌倉時代になると、穴海の

浅海化が一段と進行して、大型の船の航行が不可能となったことから、牛窓・日比(玉野市)下津井の外海コースが本航路にと変化していったようである。

その後、さらに四百年後の十七世紀末(江戸時代中期の初め)には、吉備の中海は「湾」と化し、西に広がる瀬ノ海も消滅して美田と化すこととなる。



東大寺瓦 中央の梵字は「ア」字で通常大日如来を示す。建仁3年(1203)の備前在庁からの文書では「吉岡郷瓦」と表わされている。これは万富が吉岡郷にあったことによる。岡山県立博物館蔵。